

『捷解新語』の言語研究資料としての価値について*

－韓国内の日本語研究史を中心に－

朴才煥**
jhpark7@kgu.ac.kr

＜目次＞

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 3.2 2期(1981年－2000年) |
| 2. 研究内容及び範囲 | 3.3 3期(2001年－2016年) |
| 3. 韓国内の捷解新語の日本語研究史 | 4. 結び |
| 3.1 1期(1957年－1980年) | |

主題語: 捷解新語(Chop Hae Sin O)、言語研究資料(Linguistic research material)、日本語研究史(History of Japanese Language)、資料信憑性(Data credibility)、外国資料(Foreign materials)

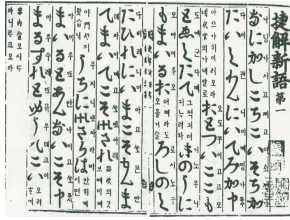
1. はじめに

朝鮮時代の司訳院で刊行された『捷解新語』(以下、原刊本と称す)は下の写真からも分かるようにひらがなで書かれた倭語(日本語)を本文とし、右側にハングルで音注を施し、一文ごとに朝鮮語で対訳が付いている文献である。1676年刊行された原刊本は、2度に渡り改修作業が行われる。『改修捷解新語』(1748年刊、以下、改修本と称す)、『重刊捷解新語』(1781年刊、以下、重刊本と称す)などがそれで、原刊本以後重刊本までは100年以上の差が認められる。

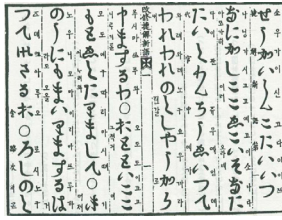
* 本研究は2015年度校内研究年支援によるものである。

** 京畿大学校 人文大学 日語日文学科 教授

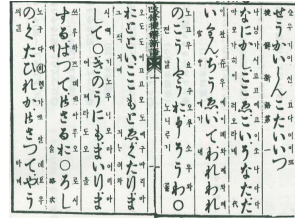
1) 原刊本は1676年刊行されているが、諸氏の研究により1636年頃成立が有力な説として認められている。しかし、筆者は著者康遇聖の日本語習得時期などを考え、1592年から1602年までの日本語が多く反映されていると判断して間違いないと思う。



<原刊本>



<改修本>



<重刊本>

三本は同じ内容で記述されていて、古代語から近代語へと転換される過渡期に作られた文献として、言語変化の様子を確認できる貴重な文献である²⁾。時代差による日本語の変化は、下に掲げる改修本の凡例の記述からも確認できる。

彼語則古今廻異使彼人読之或有不不知其為何語者故就其中古今無別者略存之余悉改正所改者十之八九我語一從旧書而亦或有古今異宜者及与彼語不相值者則不得不改正所改者十之二三(序五)
-傍線筆者-

つまり、日本語の大きな変化一彼語則古今廻異/改正所改者十之八九一が改訂の主な理由であるとの主張である。勿論、凡例の記述をそのまま受け入れることはできないが、筆者の今までの研究によると、改修本の書かれた十八世紀中頃には原刊本の言葉は不自然に感じられた可能性が高く、特に、日本語の副詞の意味用法に相当の変化があり、改修の理由の一つになった可能性は非常に高い³⁾。

しかし、1987年以前には、改修本の存在はわかっていたものの、実物を目にする事ができなかった。京都大學の安田氏が1987年パリの東洋語学校の図書館で改修本を発見し、影印本を出版して以来、近世の韓国語の研究資料としては勿論、日本語の研究資料としても貴重な文献的価値が認められたと言える。このような稀に見る文献であるにもかかわらず、日本では外国人の手により編纂されたという理由等で、それほど多く活用されているとは思えない。いままで日本人研究者による捷解新語を資料とした日本語研究は、一部の学者を中心に資料的価値を論ずる書誌学的研究に留まっており、本文の日本語を研究対象

2) 日本の時代区分の際、中世の鎌倉・室町時代(1192~1602)までを古代と想定した場合の大まかな区分ではあるが、現在の東京中心の江戸時代(1603~1867)の言語を近代語に規定したほうが妥当ではないかという判断に基づいていることを断っておく。

3) 安田章(1980)「捷解新語の改修重刊」『朝鮮資料と中世國語』所収、笠間書院、134頁

特に副詞の変化は、當代にあって、著しいと思われ、「廻異」の多くの部分を占めるであろうと考えられる。

にした具体的な研究はそれほど多く見いださない。それは安田氏の言及からもうかがい知ることができる⁴⁾。勿論、それは捷解新語をはじめとする、いわゆる朝鮮資料でなくとも、狂言など当時の多くの日本の資料が有る所以でもあろうが、安田氏の指摘のように、日本人研究者の間には、言語研究資料としての価値を認めたくない偏見が働いているのではないかと推察できる。反面、當然のことながら、韓国では多くの研究者により、中近世の韓国語の研究資料として利用されている⁵⁾。

原刊本は古代語から近代語へと移り変わる17世紀初め頃に書かれたことと、同じ内容の改訂版が約100年の内に2度も刊行されたという、あまり例を見ない珍しい資料である。それに、八割以上が朝鮮と日本の両国役人間の来往交渉と朝鮮使節の日本訪問を内容とする外交レベルでの会話を元にした口語体で書かれた文献で、規範性を供えている可能性が高く、資料としての価値は十分有ると思われる。ただ、いまのところ捷解新語の言語研究資料としての信憑性について100%確信できないところがあることも事実である⁶⁾。そこで、まず、本稿ではいままでの国内の研究成果を分野別に分け、量的に把握する。それは、今後予定している分野別の具体的な研究成果を確認するための基礎調査として活用するためである。分野別の調査が終われば、捷解新語の日本語研究資料としての資料的価値について立証できると共に、今後の活用分野も明確になるとと思われる。

2. 研究内容及び範囲

日本語の史的研究における外国資料の持つ意義は大きいと言える。ポルトガルの宣教師によって刊行された、いわゆるキリシタン文献と呼ばれる『日葡辞書』『日本大文典』『天草版平家物語』『天草版伊曾保物語』等は16世紀末から17世紀にかけての日本語を多様に記述して

4) 安田章(2000)『『捷解新語』の重要性』、1頁

出ることなら『捷解新語』など敬遠、忌避しよう、使わないでおこうとする日本の国語使研究者が殆んどであるとしても、それほど的外れでもあるまいと思っているが(後略)

5) 本稿では日本語史に焦点が当てられており、韓国語関連研究は鄭光(2002)や정승혜(2003)など韓国語研究者の成果を参照されたい。

6) 安田章(1996)『国語史の中世』所収『外国資料の陥穽』、42-43頁

少なくとも刊行の際に日本人の関与が考えられない、朝鮮資料の捷解新語には朝鮮人康遇聖が関わるところの、外国人が日本語を記録する際に起こりがちな歪みが予想され、(中略)しかしながら、「熟語倭俗、且善其語」と称せられた(通文館志)ところの康遇聖であったけれども、彼が捷解新語に無意識に裡に遺した、朝鮮人の誤りやすい語形存在から、捷解新語の「朝鮮人」性に不当なまでに拘り、捷解新語を敬遠して来たのが、実状であろう。

おり、日本語研究資料として 貴重な文献的価値が認められている。それに比べて、15世紀に刊行された『伊呂波』をはじめとする捷解新語三本や『倭語類解』など、いわゆる朝鮮資料は前述のごとく貴重な資料であるにも関わらず、それほど多く研究されているとは思えない。特に、日本の研究者による日本語研究資料としての活用は極めて少ないのが現状である。そこで、本稿では捷解新語に関する研究成果を分野別にまとめることで、日本語研究資料としての価値を立証するとともに、今後の研究に活用したい。

研究対象は国内で発表された捷解新語関連論文や著書を国会電子図書館のキーワード(捷解新語)検索を通して調査した。検索の結果、1957年から2016年までの206件の論文と著書が検出された。その内、捷解新語の日本語を分析した研究や韓国語の対訳など関連研究の172編を中心に調査を行った。まず、20年ごとに研究の推移を考察するために、1957年から1980年までを1期、1981年から2000年までを2期、2001年から2016年までを3期に分け、研究成果を調べた。その他、国会電子図書館のキーワード検索では出ていないが、調査の結果タイトルが確認できた論文については調査対象に含めた。韓国語関連研究は今回の調査では割愛したい。

分析は1. 音声音韻 2. 文字表記 3. 文法 4. 語彙 5. 敬語 6. 日本語史 7. その他の七つの分野に分け、発表時期を基準に研究成果を略述する。分類は論文や著書のタイトル、または結論部分の内容によって行った。原文を確認できない場合はタイトルのみにより分類し、参考文献に提示した。

3. 韓国内の捷解新語の日本語研究史

この章では、1957年から2016年までの韓国内で出された捷解新語⁷⁾に関する研究のうち、日本語関連研究を中心に、3期に分けて研究内容を確認してみたい。

3.1 1期(1957年～1980年)

3.1.1 音声音韻

この期間の代表的で、唯一の研究として金完鎮(1957)が挙げられる。氏は原刊本における

7) この章での「捷解新語」は別に明記してない限り、「捷解新語三本」の意味である。

本文のハングル轉寫を子音、母音、鼻母音の順に分析している。論文の冒頭では、捷解新語と文釈の言語史資料としての価値に比べ、研究対象として取り扱われていない現状を指摘した後、「は」行音の「わ」行音化現象や鼻母音の衰退が改訂の理由の一つだと推論している。

この時期の前半は、植民地からの解放と韓国戦争などを経て、日本に関するものは社会的に受け入れられない状態であったと思われる。1965年日本との国交正常化以来、一部の大学で日本関連学科が設置されたが、学科設立の増加や研究者を排出するようになったのは、80年中期以降からである。音声音韻以外の分野ではこれといった研究成果はなく、1973年に原刊本の影印本が出版されたことに止まっている。

3.2 2期(1981年～2000年)

この期間に出された論文と書籍は54編で、韓国人研究者による捷解新語関連研究が行われはじめた時期で、90年以降本格化していることが確認できる。

3.2.1 音声音韻

裴錫柱(1993)では、捷解新語の四つ仮名の注音法について考察し、原刊本において四つ仮名の現存と、重刊本にも混同の例が現れていることを明らかにした。趙垺熙(1994)では、エ段音節母音について調べている。李東郁(1998)では、捷解新語と『倭語類解』のエ段音について調べている。

3.2.2 文字表記

裴錫柱(1990)は、清音化した濁音表記について考察している。趙南徳(1997)では、『捷解新語』と『伊路波』の比較を通して「かな」の使用状況を調べている。趙垺熙(1998)では、捷解新語の清音表記について調べている。安昭貞(1998)では、原刊本の構成と表記(注音法と韓国語訳を含む)について調べた後、巻1の漢字語について調べている。

3.2.3 文法

片茂鎮(1987a)(1987b)は原刊本の「ガとノ、へとニ」についての調査である。鄭昌鎬(1990)では、「ほどに・により・ゆえ」の交替について考察を行った。韓鐸哲・金永好(1994)では、韓国語の「까지」と日本語の「まで」について比較していて、「まで」の方が意味範囲がもっと広く使われていることを明らかにした。車峴京(1995)は原刊本と改修本を対照し、格助詞、

副助詞、接続助詞、終助詞について調べている。片茂鎮(1996)では、主格表現について考察している。池景來(1996)では、形式名詞「もの」と「こと」について調べている。李康民(1998)では、原刊本と改修本の推量・意志を表す「う(よう)・うず((る)」について調べ「うず(る)」の衰退と、「う(よう)」の定着を確認している。池景來・森下喜一(1998)では、事物を表す代名詞について考察している。林昌奎(1998b)は、原刊本に現れる「を」格と呼応する「あう」について調べたもので、先行研究で誤用と判定した用法が過渡期の用法の可能性があると主張している。安昭貞(1999a)(1999b)では、日本語の指示代名詞について考察している。丁鋼徹(1999)では、受給表現のうち「やる」について調べている。洪紫永(1999)は、捷解新語の接続助詞について用例の分析を行った。黃美玉(2000)では、「ほど」について対照研究を行っている。安昭貞(2000a)(2000b)では、指示語と文末にくる語について考察している。

3.2.4 語彙

古田和子(1985)では、原刊本の漢字語について日本語と韓国語を対照検討して調べている。朴才煥(1993a)では「すなわち」、(1994)では「一定」、(1996a)では「かねて」、(1999b)では「そっと」、(2000)では「しかしか」について語誌研究を行っている。(1993b)(1996b)(1997)では、捷解新語を比較し、変化可能性の高い副詞を取り上げて基礎調査を行っている。(1999a)では捷解新語の副詞研究資料としての価値について、先行研究をふまえ主張している。松浦陽子(1998)では、「くう」と「たぶ」について調査し、「たぶ」が17世紀初までは謙讓語の用法を保っていたことを明らかにした。池景來(2000)では、捷解新語の日本語語彙の計量的考察を行っている。

3.2.5 敬語

韓美卿(1985)は原刊本の敬語接頭辞「御」についての研究で具体的な考察が行われている。韓美卿(1988)は原刊本と重刊本に現れる敬語の丁寧語化現象について具体的に調べている。調査の結果、室町末期から現れて江戸中期にはその傾向が強くなっている丁寧語化が原刊本と重刊本にもよく現れていることを明らかにした。李徳培(1989)(1990)では、捷解新語の「ござる」の意味用法について調べている。尹鐘和(1989)(1992)では、韓国語の比較を通して、改修本の凡例の日本語の変化により改訂したという記述の多くの部分を待遇表現の変化が占めていると結論づけている。後者では、その証拠として「まする」の多用を挙げている。全花子(1994)は、韓美卿(1985)と同じタイトルで、時間の差があるにも関わらず、新しい発見や見解が示されてなく、ほぼ同じ結論に終わっている。

3.2.6 日本語史

李康民(1996)では、捷解新語を利用した日本語史研究において注意すべき点について提示している。

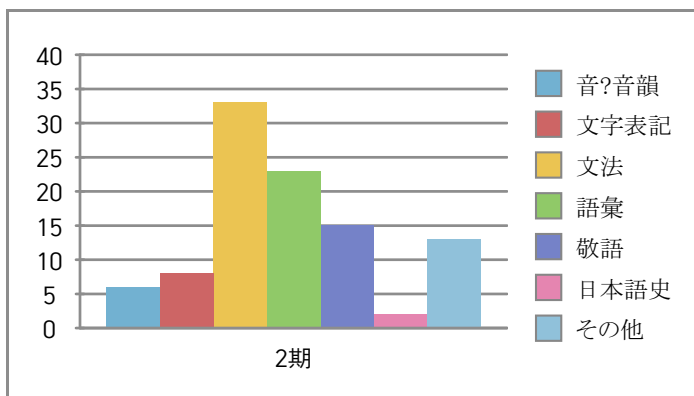
3.2.7 その他

李徳培(1987)は「改修本との対照を通じて行った原刊本の巻十の用語について」という意味のタイトルになっているが、内容は巻十の音韻や表現の改め、誤謬の訂正など改修本との対照を通じての調査である。ただ、ここで言う改修本とは、実は今で言う重刊本である。安熙貞(1995)では、日韓対訳の誤訳について調べている。李道潤(1997)では、捷解新語の翻訳語について調査している。趙南徳(1999)では頭注について調べている。池景來(1999a)では「存ずる」の対訳について、(1999b)では改修の経緯について凡例の記述などを詳しく分析している。安田章(2000)では、捷解新語の日本語研究資料としての重要性について述べている。

この期間に出された論文や著書の分野別割合は下の<表1><図1>の通りである。その内、文法分野の研究が33%で一番多く、その次に語彙関連の研究が23%、その次が敬語関連研究で、三つの分野で7割を占めている。今回の調査対象の内、30%(54編)ぐらいがこの時期に出されている。

<表1>

項目	音声音韻	文字表記	文法	語彙	敬語	日本語史	その他
%	6	8	33	23	15	2	13



<図1>

特に、この時期に注目すべき研究として、指事語や漢字語について調査した安昭貞、日本語史や推量表現について調査した李康民、用語や改修について調べた李德培、音韻や表記について調べた趙垺熙、文法分野の池景來、片茂鎮、敬語分野の韓美卿、語彙(副詞)分野の朴才煥などがある。

3.3 3期(2001年～2016年)

この期間に出された論文と著書は117編で、国内で捷解新語の日本語関連研究が盛んに行われた時期である。

3.3.1 音声音韻

趙來喆(2003)は、捷解新語における特殊音素及び拗音に對する音注配置について調査を行った。(2007b)は長音について、(2008)は日本語表記とハングル音注について、調べている。權董顯(2009b)はオ段長音について調べている。趙來喆(2012)は改修本の韓国語対訳とハングル音注配置について調査を行った。趙垺熙(2011)は捷解新語に見られる短呼形を調査し、その分布、下接語、拍数との関わりについて考察を行ったうえ、原刊本から改修本、重刊本への改修に見られる短呼形の背景について調べている。

3.3.2 文字表記

趙來喆(2004)は、捷解新語の日本語本文の仮名表記について調べたもので、日本語表記法に基づいていない特殊な表記が用いられている理由を解明している。(2005)はオ段長音表記について、(2007a)はハングル音注における特殊音素表記を中心に、(2009)はハングル音注の重ね子音の表記について調べている。李東郁(2004)は朝鮮時代の日本語學習書のタ行オ段拗長音表記について調べている。박성애(2005)は原刊本における并書の音注表記について調査を行った。조수현(2007)はタ行オ段拗長音の音注表記について調査した。李東郁(2007a)は捷解新語と『倭語類解』に表れた四つ仮名について、(2007b)はウ段とオ段との交替表記について調査を行った。東ヶ崎祐一(2009)は重刊本における仮名の使用状況について調べている。特に、巻十の「異体仮名」の用法を中心にしているが、巻一から巻九までの仮名についても原刊本と対照し調査している。調査の結果、異体仮名や連綿字に用いられる字の多くは、近世の浄瑠璃本や草双紙類で頻用されるものであるのも明らかにしている。趙垺熙(2009a)は漢字表記とハングル表記の併用について、(2009b)は漢字表記の改修を中心に調べている。

3.3.3 文法

金殷奭(2001)は原刊本に現れている「こなた」「そなた」の用法を場面中心に分析したものである。成禧慶(2001)は捷解新語の「いで」の表記と発音及び用法について調べたものである。趙燭熙(2001)は打消表現とズ終止形の衰退過程について考察した。丁鋼徹(2001)は捷解新語の授與動詞について考察した。朴喜南(2002)は『天草版平家物語』『大蔵虎明本狂言集』捷解新語に現れる接續助詞「ホドニ」「ニヨッテ」「ニヨリ」のモダリティ性について調べている。注目すべきところは『天草版平家物語』『大蔵虎明本狂言集』に現れていない「により」が改修本56例、重刊本43例も現れることである。つまり、近世初期条件の確定表現として圧倒的に多く用いられていた「ほどこ」から「によって」「により」に取って代わられている様子が伺える。安昭貞(2002)は捷解新語の附屬語の文末部構成の特性について、(2003)は述語部構成に関する研究を行っている。權董顯(2003)(2004a)(2004b)(2004c)(2004d)(2004e)(2006)では、日本語の指示詞について考察を行っている。(2007)は形容詞について、(2008a)は形容詞と形容動詞について、(2008b)は条件表現について、(2008c)は単行本としてそれまでの研究成果を一冊の本にまとめた。(2009a)は条件表現について、(2010a)は「コ」系列について、(2010b)は「ソ」系列について、(2012)はコソアドについて調べている。金三順(2003)は、捷解新語諸異本の韓日兩國語の原因理由を表す条件表現について考察している。李鍾姬(2003)は、對照研究の観点で捷解新語の副詞の形態的を、(2005a)では捷解新語の疑問要素と呼應する副詞について、(2005b)では「呼應副詞」について、推量要素と呼應する副詞について、(2006a)は推量要素と呼應する副詞について、(2006b)では假定条件要素と呼應する副詞について、(2007a)では態度副詞について、(2007b)では順序副詞について調べている。林昌奎(2003a)(2003b)(2007)では「を」格の誤用をはじめ、呼応する自動詞他動詞について調査している。古田和子(2006)捷解新語の慣用的表現について調査を行った。이훈선(2007)は人稱代名詞の改修について考察した。宋敬株(2011)は原刊本の「は」と「が」について調査を行った。松上文子(2014)は捷解新語における形式名詞について調査を行った。신충균(2016)改修本の逆接条件表現について考察を行った。朴喜南(2016)は「ほどこ」と「により」について調査を行った。

3.3.4 語彙

池景來(2002)は捷解新語の語彙について調べている。朴才煥(2001)は「いかさま」について、(2003a)は「するする」「そうじて」について、(2003b)は「けっく」について意味変化の可能性を同時期の日本の文献の用例を元に語史研究を行っている。(2003c)は、それまでの研究成果をまとめたものである。(2005)では「いちえん」「いっせつ」について、(2007)は副詞の語

彙について、(2008)は「ちと」について、(2009)は「げに(も)」について、(2010)は「なんとして」について、(2012)は「ほどなく」について、(2016)には「しだいこ」について研究している。古田和子(2003)は原刊本の對譯文における漢字表記の語について調べている。林昌奎(2003)は自動詞「背く」に関する調査を行っている。金基民(2003)(2004)は捷解新語を対照し、語彙の交替や意味の変化や共通の語彙について調べている。李錫順(2005)は「ゑんてい・かねて・まえかど・まえかた・もはや」について調査している。金英玉(2006)は 韓國語對譯文に現れる漢字語について、(2008)は『伊路波』と捷解新語の共通語彙を調査し、『日葡辞典』『時代別国語大辞典』と比較調査を行った。김은숙(2008)は韓國語対訳に現れる韓日共同の漢字語について調べている。丁鋼徹(2010)は授受動詞「つかわす」について調べている。小泉和生(2010)は「するすると」と「술술이」の対照研究を行った。韓鐸哲、趙垺熙(2011)は「いかう」について調べている。

趙垺熙(2012)は「道理」「通」について、(2013a)は「病気」関連語について調査している。(2013b)は捷解新語に現れる韓日両国語の借用語について、(2015a)は捷解新語の「様、様に、様な、如何様、仰様、斯様、仕舞様、為様、申し様」の用法と、その対訳語「양、-로、테、타시、타、즉이、대로、시、하야、갓하야、아무리、이대도록」などの多様な対訳語が使われている背景について考察を行った。(2015b)は「懇ろ・随分・殊の外・仰山・一段・いかに」について、(2016)は「会う」と「見る」「対面」「御目に掛かる」の改修について調べている。호규진(2016)は『捷解新語』三本の語彙量と出現頻度などについて調査を行った。

3.3.5 敬語

韓美卿(2010)は文末形式を通して日本語敬語の聞き手配慮用法の史的考察を行っている。

3.3.6 日本語史

なし

3.3.7 その他

趙南徳(2001)は冠註について調べている。韓美卿(2002)日本語教育の観点から捷解新語を見直している。林昌奎(2004)(2005)は捷解新語の一部の用例のハングル翻訳について調べたもので、語彙の相違を理解させるため、意図的に自然な表現と直訳したものを提示していると結論づけている。趙來喆(2004)は捷解新語における日本語本文の性質について考察している。金英玉(2005)では捷解新語の韓國語對譯文に現れる日本語單語について調査して

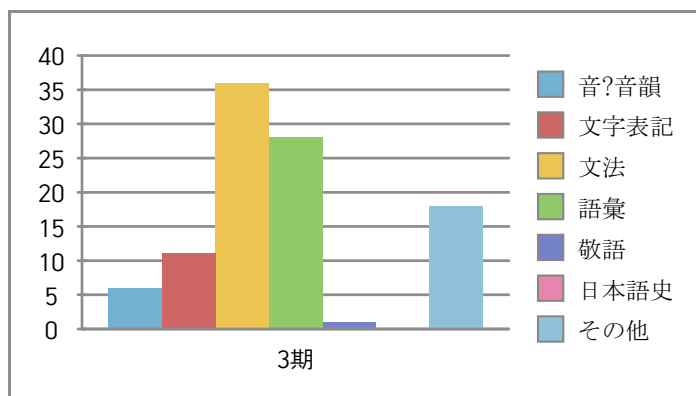
いる。權董顯(2005)は捷解新語の「コ、ソ、ア(カ)、ド」誤謬の可能性について調査を行った。安田章(2006)は韓国人の遺した日本語史文献として捷解新語の資料としての価値について述べている。趙南徳(2006a)は大字表示について、(2006b)では捷解新語の構成について、(2007)では重刊本の版本による別途表記について調べている。古田和子(2006)では、捷解新語の資料性と漢字漢語について幅広い考察を行っている。趙來喆(2007)は日本語学習書としての捷解新語の性格解明を試みた。이훈선(2007)は人稱代名詞の改修について考察した。林昌奎(2009a)(2009b)(2011)では巻十の候文体書簡文の韓国語対訳について調査したもので、改修本での不自然な解釈が重刊本で直されていることを明らかにした。が記されている状況を調べている。송경우(2011)は原刊本における「は」と「が」の韓国語対訳を調べている。

김은숙(2012)は對譯文の日本語について調べている。池田ひろみ(2012)は漢語を用いた表現の改修に関する考察を行っている。丁鋼徹(2015)は捷解新語の資料性について、韓日両言語の方言を中心に考察した。

この期間に出された論文や著書の分野別割合は下の<表2>の通りで、それをグラフで表したのが<図2>である。その内、文法分野の研究が36%で一番多く、その次に語彙関連の研究が28%、その次がその他で、三つの分野で8割以上を占めている。今回の調査対象の内、70%(117編)くらいがこの時期に出されたものである。

<表2>

項目	音声音韻	文字表記	文法	語彙	敬語	日本語史	その他
%	6	11	36	28	1	0	18



<図2>

特に、この時期の音韻・表記・語彙など幅広い研究を行った趙炯熙、音声音韻分野の趙來喆、指事詞について調査した權董顯、文法分野の李鍾姬、語彙分野の朴才煥などは注目すべき研究である。

4. 結び

本研究は、捷解新語三本の言語資料―特に、日本語研究資料―としての価値を立証するために、いままで韓国内で行われた研究を調査し分野別・発表時期順にまとめた調査である。それは、引き続き行う予定の分野別の具体的な研究成果を確認するための基礎調査として位置づけられる。以上の調査結果をまとめると次のようになる。

1期(1956年~1980年)は、日本語を学習又は研究する人が少ない時期であるし、改修本の存在は知っていたものの、実物を目にすることができず、捷解新語関連研究は殆んどなかった。

2期(1981年~2000年)には、調査対象の内、3割(4本)ほどが該当する。その内、文法、語彙、敬語分野の論文が7割程度を占めている。

3期(2001年~2016年)には、調査対象の内、7割(117本)ほどが該当する。その内、文法、語彙分野の論文が7割程度を占めている。2期に15%もあった敬語関連研究は1%に止まっている。

今回の調査は国会図書館のキーワード検索で得た資料と著者の調べた一部の論文を元にしており、外されている論文や著書がある可能性もある。今後の調査で補っていきたい。

【参考文献】

- 權董顯(2003)『『첩해신어(捷解新語)』의 방형지시대명사에 대해서:「こち」「そち」「あち」「あちこち」「どち」를 중심으로』『日本研究』20号
- _____(2004a)『『捷解新語』에 있어서 사물을 나타내는 지시대명사에 대하여』『日本語学研究』9輯
- _____(2004b)『『捷解新語』의 지시체계에 관한 연구:「코·소·아(カ)・ド」를 중심으로』한국외국어대학교 학위논문
- _____(2004c)『『첩해신어(捷解新語)』의 인칭대명사에 대해서:「こなた」「こなたしゅ」「そなた」「そなたしゅ」「どなた」를 중심으로』『日本研究』22
- _____(2004d)『『첩해신어(捷解新語)』의 장소의 지시사에 대해서:「ここ」「ここもと」「そこ」「そこもと」「どこ」를 중심으로』『日本研究』23号

- _____(2004c)『『捷解新語』에 있어서 지시부사에 대한 일고찰(一考察)』『日本文化學報』20輯
- _____(2005)『『捷解新語』에 있어서 오류(誤謬)의 가능성에 대하여』『日語日文學研究』52輯 1卷
- _____(2006)『『捷解新語』에 있어서 지시체계에 대해서:「ト」系列을 중심으로』『日本語文學』31輯
- _____(2007)『첩해신어(捷解新語)에 있어서 형용사에 대한 고찰』『日語日文學研究』63輯 1卷
- _____(2008a)『『첩해신어』에 나타난 조건표현에 대한 일고찰1』『日本研究』36号
- _____(2008b)『『첩해신어』의 형용사 및 형용동사에 대한 고찰』『日本語文學』37輯
- _____(2008c)『첩해신어의 コ・ソ・ア(カ)・ド에 관한 연구』한국학술정보
- _____(2009a)『『첩해신어』에 나타난 才단장음에 대해서』『日本研究』40号
- _____(2009b)『『첩해신어』에 나타난 조건표현에 대한 일고찰2』『日本學研究』27輯
- _____(2010a)『『첩해신어』의 「ソ」 계열에 대해서』『日本研究』43号
- _____(2010b)『『捷解新語』의 「コ」系列에 대해서』『日本語文學』44輯
- _____(2012)『『첩해신어』의 コソアド에 대해서』『日本研究』54号
- 金殷奭(2001)『『捷解新語』에 나타나는 2인칭대명사에 대하여』『日語日文學研究』38輯 2卷
- 金基民(2003)『『捷解新語』의 어휘연구』경희대학교 학위논문
- _____(2004)『『捷解新語』의 改修 過程과 語彙研究』보고서
- 金三順(2003)『韓日兩國語의 原因理由 條件表現에 대한 考察:『捷解新語』諸異本을 中心으로』『日本學研究』13輯
- 金完鎭(1957)『捷解新語에서의 日本語 轉寫에 對하여:특히 鼻母音을 中心으로』『文理大學報』5輯
- 金英玉(2005)『捷解新語의 韓國語 對譯文에 나타나는 日本語 單語에 대하여』『日語日文學研究』55輯 1卷
- _____(2006)『捷解新語의 韓國語 對譯文에 나타나는 漢字語에 대한 一考察』『日本學報』66輯
- _____(2007)『倭學書에 나타나는 語頭 ハ行音에 대하여』『日語日文學研究』60輯 1卷
- _____(2008)『왜학서 학습서류의 공통 어휘에 대하여』『日本語學研究』22輯
- 김은숙(2008)『“첩해신어” 역문의 한자어에 대해』『日語日文學研究』65輯 1卷
- _____(2013)『朝鮮後期 文獻에 나타난 日本語: 조선왕조실록, 첩해신어, 사행록』경희대학교 학위논문
- 박성애(2005)『『捷解新語』における 并書 の音注表記に關する 考察「原刊本」を中心に』단국대학교 학위논문
- 朴喜南(2002)『일본어 접속조사 의 변화 고찰:「ホドニ」「ニヨッテ」「ニヨリ」를 중심으로』『日本學報』50輯
- _____(2016)『『捷解新語』의 이유표현-「ほどに」「により」를 중심으로』『日本文化學報』69輯
- 裴錫柱(1990)『いわゆる朝鮮資料のハングルによる清音化した濁音表記考』『韓國觀光大學 論文集』2輯
- _____(1993)『捷解新語』の注音法再考:四つ假名のハングルによる轉寫表記を中心に』『慶州大學校 論文集』5輯
- 成禧慶(2001)『『捷解新語』의 「い」で の表記와 發音 및 用法에 關하여:原刊本・改修本・重刊本の 比較를 中心으로』『日本學報』46輯
- 宋敬株(2011)『『첩해신어』원간본에 있어서 ‘하’와 ‘가’: ‘하’와 ‘가’의 한국어 대역을 중심으로』『日語日文學研究』77輯 1卷
- 신충균(2016)『朝鮮時代 日本語 學習書의 條件表現:『捷解新語』의 1次改修를 中心으로 본 逆接條件表現』『日本語文學』69輯
- 安昭貞(1998)『『捷解新語』의 表記와 漢字語 調査』『人文論叢』10輯 慶南大學校 人文科學研究所
- _____(1999)『『첩해신어』의 指示語考, 1』『慶南大學校 大學院論叢』14輯 2卷
- _____(1999)『『첩해신어』의 指示語考, 2』『教育理論과 實踐』9
- _____(2000)『『첩해신어』 일본어의 문법적 특성 연구: 지시어와 문말구조를 중심으로』한양대학교 학위논문
- _____(2000)『近世資料를 통해 본 文末語 研究 1:『捷解新語』의 構造를 中心으로』『教育理論과 實踐』10
- _____(2002)『文末部構成의 特性:『捷解新語』附屬語를 中心으로』『日本學報』53輯
- _____(2003)『近世語의 述語部構成에 關한 研究:『捷解新語』의 文末形式對照를 中心으로』『日本學報』55輯

- 安熙貞(1995)『『첩해신어』의 연구:日韓對譯의 誤譯에 관한 고찰』중앙대학교 교육대학원 학위논문
- 李康民(1990)『『捷解新語』의 成立と表現』『国語国文』60卷12号
- _____(1996)『『捷解新語』와 日本語史』『漢陽日本學』4輯, 漢陽日本學會
- _____(1998)『『捷解新語』의 推量表現』『漢陽日本學』6輯, 漢陽日本學會
- 李德培(1987)『『捷解新語』卷十の用語について:原刊本と改修本との對照を通じて見た問題点を中心に』『日本學報』18輯
- _____(1989)『『捷解新語』의 「御ざる」』『語學教育』19輯, 全南大學校 語學研究所
- _____(1990)『『捷解新語』의 改修에 대한 고찰:原刊本,改修本,重刊改修本の 「ござる」를 중심으로』『龍鳳論叢』19輯, 全南大學校 人文科學研究所
- 李道潤(1997)『捷解新語에 있어서의 번역어에 대한 一考察』『論文集』1輯, 韓國外國語大學校 通譯研究所
- 李東郁(1998)『17·18세기 조선자료에 나타난 일본어 ㄷ단음 일고찰:『첩해신어』·『왜어유해』의 한글표기를 중심으로』한국외국어대학교 학위논문
- _____(2004)『司譯院の日本語學習書』『日本學研究』15輯
- _____(2004)『朝鮮時代の日本語學習書のタ行オ段拗長音表記について』『日本研究』22号
- _____(2007)『『捷解新語』·『倭語類解』に表れた四つ假名について』『日本研究』31号
- _____(2007)『『捷解新語』に現れるウ段とオ段との交替表記』『日本語文學』39輯
- 李錫順(2005)『『捷解新語』副詞考:「ゑんてい・かたて・まえた・まえた・もはや」를 중심으로』『漢陽日本學』14輯
- 李鍾姬(2003)『『捷解新語』부사의 형태적 고찰』『日語日文學研究』45輯 1卷
- _____(2005)『『捷解新語』의 「疑問要素와 呼應하는 副詞」에 대하여』『日本語学研究』13輯
- _____(2005)『『捷解新語』における「呼應副詞」について』『日本文化研究』13輯
- _____(2006)『假定條件要素와 呼應하는 副詞』에 대하여:『捷解新語』의 용례를 중심으로』『日本學報』67輯
- _____(2006)『推量요소와 호응하는 副詞』에 대하여:『捷解新語』의 용례를 중심으로』『日本言語文化』8輯
- _____(2006)『『捷解新語』부사의 개수양상:「추량요소와 호응하는 부사」를 중심으로』『日本研究』28号
- _____(2007)『『捷解新語』의 「順序副詞」에 대하여』『日語日文學研究』63輯 1卷
- _____(2007)『『捷解新語』의 「態度副詞」에 대하여』『日本語学研究』18輯
- 李太永(1997)『訳註捷解新語』太学社
- 이훈선(2007)『『첩해신어』의 인칭대명사 개수에 관한 고찰』부산대학교 학위논문
- 林昌奎(1998a)『『捷解新語』における「を」格の誤用について』『月刊言語2』大修館書店
- _____(1998b)『『捷解新語』의 자동사 「아우」와 共起하는 조사 「을」에 대하여』『日語日文學研究』32輯
- _____(2003a)『『捷解新語』における二重「を」構文について』『日語日文學研究』44輯 1卷
- _____(2003b)『『捷解新語』における狀態述語と共起する「を」について』『日本文化學報』16輯
- _____(2003c)『自動詞「背く」에 대하여:『捷解新語』의 例를 중심으로』『日本語学研究』8輯
- _____(2004)『『捷解新語』의 한글翻譯について』『日本文化研究』12輯
- _____(2005)『『捷解新語』의 한글翻譯について<その二>』『日本語学研究』第13輯
- _____(2007)『『捷解新語』의 他動詞について:「於」と共起する他動詞を中心に日韓對照の觀點から』『日本學報』70輯
- _____(2009a)『『捷解新語』卷十의 文面解讀』『日本語学研究』25輯
- _____(2009b)『『捷解新語』卷十의 文面解讀2』『日本文化學報』42輯
- _____(2011)『『捷解新語』卷十의 文面解讀3』『日本文化學報』50輯
- 全花子(1994)『原刊本「捷解新語」의 敬語接頭辭「御」에 대하여』『日本學年報』6
- 鄭光(1984)『捷解新語의 成立時期에 관한 몇 문제』『牧泉兪昌均博士還甲紀念論文集』
- _____(1988)『訳科の 倭학과 倭學書』『韓國學報』第50集

- _____(1988)『司訳院倭学研究』太学社
- _____(2004)『역학서연구』J&C
- _____(2007)「韓國における日本語教育の歴史」『日本文化研究』21輯
- 정승혜 (2003)『조선 후기 왜학서 연구』太学社
- 丁銅徹(1999)『『捷解新語』의 受給표현에 대한 고찰:수급동사 「ヤル」를 중심으로』『日本語文學』6輯
- _____(2001)『『捷解新語』의 授與動詞에 대한 考察:「原刊本」「改修本」「重刊本」의 比較를 중심으로』『日語日文學』15輯
- 丁銅徹(2010)「授受動詞「つかわす」의 一考察:『捷解新語』를 中心으로」『日本研究』46号
- _____(2015)「捷解新語의 資料性에 대한 一考察-韓日 兩言語의 方言을 中心으로-」『日本文化學報』67輯
- 鄭昌鎬(1990)「原刊本改修本における「ほどに」「により」「ゆえ」の交替現象について」聖心外國語專門大學 論文集9
- 趙垺熙(1994)『『捷解新語』のエ段音節母音部表記について-エ段音節母音部の表記上制約を中心に-』『창신논집』3호
- _____(1995)『『捷解新語』捷解新語』の音注の改修について-原刊本/改修本/重刊本における改修の全體的な傾向性を中心に-』『岡大論考』23
- _____(1997)「朝鮮時代の日本語學習書に見られるエ段音節母音部表記について」『広島大教育学紀要』46輯
- _____(1998a)「朝鮮時代の日本語學習書に見られる清音表記について:『捷解新語』を中心に」『日語日文學』10輯
- _____(1998b)「朝鮮時代の日本語學習書に見られる促音表記について」『창신논집』7호
- _____(1999)「朝鮮資料の日本語學習書に見られる撥音の音注表記」『日語日文學』12輯
- _____(2000)「朝鮮資料に現れるタ行才段拗音子音部の表記について」『日本學報』45輯
- _____(2001)「打消表現とズ終止形の衰退過程について:捷解新語を中心に」『日本文化學報』11輯
- _____(2002a)「朝鮮資料の音注表記に見られる音聲的特徴について」『日本學報』50輯
- _____(2002b)「朝鮮資料의 母音 音注表記에 대하여」『日本語文學』15輯
- _____(2003)「조선시대 일본어 학습서의 한글 音注表記에 의한 일본어 清濁音의 음성적 연구」『日本文化學報』16輯
- _____(2005a)「朝鮮資料의 한글 音注에 나타나는 硬音表記와 文弱센트와의 관계에 대하여」『日本語文學』24輯
- _____(2005b)「조선통신사 수행 역관과 첩해신어의 개수 - 일본어 개수를 중심으로」『조선통신사학회』1호
- _____(2006)「왜학서의 축음에 표기되어 있는 한글 음주의 특징과 문제점」『日語日文學』30輯
- _____(2009a)『『捷解新語』의 對譯 韓國語에 대하여 :한자표기와 한글표기의 併用을 中心으로』『日語日文學』41輯
- _____(2009b)「捷解新語의 對譯 韓國語 改修에 대하여 :漢字表記의 改修를 中心으로」『日語日文學』42輯
- _____(2011a)『『捷解新語』に用いられた「いかう」について』『동북아문화연구』28輯
- _____(2011b)『『捷解新語』に見られる短呼形について』『日本語教育』58輯
- _____(2012)『『捷解新語』に見られる「道理」「通」について』『日本語学研究』第35輯
- _____(2013a)「異文化の<境界>に見られる言語表象:捷解新語に現れる語彙を中心に」『日本學研究』39輯
- _____(2013b)『『捷解新語』に見られる「病氣」関連語とその対訳について』『日語日文學』58輯
- _____(2015a)『『捷解新語』に見られる「やう[様]」の用法と対訳について』『日本近代学研究』47輯
- _____(2015b)『『捷解新語』における副詞「懇ろ・随分・殊の外・仰山・一段・いかにも」とその対訳について』『日本學報』105輯
- _____(2016)『『捷解新語』に見られる「会う」と「見る」「対面」「御目に掛かる」の改修について』『比較日本學』38輯
- 趙南德(1994)『捷解新語의 改修分析』博而精

- _____(1997)『『捷解新語』의 「가나」使用에 대한 考察:『伊路波』와의 관련을 중심으로』『建國大學校 教育研究所 論文集』21輯
- _____(1999)『『捷解新語』의 冠註에 대한 考察1:全同例를 중심으로』『建國大學校 教育研究所 論文集』23輯
- _____(2001)『『捷解新語』의 冠註에 대한 考察2:我音同關係例를 중심으로』『建國大學校 教育研究所 論文集』25輯
- _____(2006)『『捷解新語』의 大字表示 分析』『日本文化學報』30輯
- _____(2007)『『倭學書』『捷解新語』의 別도 표시에 대하여』『日語日文學研究』60輯 1卷
- _____(2006)『『倭學書』『捷解新語』의 構成 考察:행 목음의 觀點으로』『日本語文學』31輯
- 趙來喆(2003)『『捷解新語』における特殊音素及び拗音に對する音注配置について:日本語學習に役立たせるための音注,音注配置』『日本學報』56輯
- _____(2004)『『捷解新語』における日本語本文の性質』『日本學報』60輯
- _____(2005)『『捷解新語』における長音:才段長音表記を中心に』『日本語文學』25輯
- _____(2007a)『『捷解新語』における長音:日本語學習書としての性格解明』『日本語文學』35輯
- _____(2007b)『日本語學習書としての『捷解新語』:ハングル音注における特殊音素表記を中心に』『外國語教育研究』21卷 1号
- _____(2007c)『日本語學習書としての『捷解新語』の性格解明』『日語教育』40輯
- _____(2008)『『捷解新語』における日本語表記とハングル音注』『日本語文學』39輯
- _____(2009)『『捷解新語』におけるハングル表記:ハングル音注の重ね子音を中心に』『日本近代學研究』26輯
- _____(2012)『朝鮮資料における朝鮮語対訳とハングル音注配置:『捷解新語』改修本を中心に』『日本近代學研究』36輯
- 조수현(2007)『『捷解新語』タ행才단요장음 자음부의 음주표기에 대한 고찰』부산대학교 학위논문
- 池景來森下喜一(1998)『일본어의 사물대명사 연구:『捷解新語』를 중심으로』『日本語文學』4輯
- 池景來(1996)『『捷解新語』의 형식명사 「もの」「こと」고찰』『日本語文學』2輯
- _____(1999)『「存ずる」對譯相關에 대하여:『捷解新語』를 중심으로』『日本語文學』6輯
- _____(1999)『『捷解新語』改修의 經緯에 대하여』『日本語文學』7輯
- _____(2001)『『첩해신어』의 일본어 어휘의 계량적 고찰』전주대학교 학위논문
- _____(2002)『『첩해신어』의 일본어 어휘 연구』전남대학교 출판부
- 車峴京(1995)『『捷解新語』에 있어서 조사의 연구:原刊本과 改修本の 용례를 중심으로』중앙대학교 학위논문
- 片茂鎮(1987a)『『捷解新語』의 格助詞 I:ガとノ』『日本學報』18輯
- _____(1987b)『『捷解新語』의 格助詞 II:へと二』『日本學報』19輯
- _____(1996)『『捷解新語』의 主格表現에 대하여』『日本學報』37輯
- _____(1996)『『捷解新語』의 格助詞「が・の」의 待遇表現價値에 대하여』『日本文化學報』1輯
- 韓美卿(1985)『『捷解新語』의 敬語接頭辭「御」에 대하여』『日本研究』1号
- _____(1988)『捷解新語における敬語用法の一考察:丁寧語への傾斜を中心に』『韓國外國語大學校 論文集』21輯
- _____(1995)『『捷解新語』における敬語研究 I・II(博而精)』
- _____(1998)『捷解新語의 「の,가」의 用法:待遇表現의 觀點에서』『日本研究』13号
- _____(2002)『日本語教育의 觀點에서 보는 『捷解新語』』『日本研究』19号
- _____(2010)『일본어 경어의 청자배려에 대한 사적고찰:『捷解新語』의 문말형식을 중심으로』『日本言語文化』17輯
- 韓澤哲·金永好(1994)『『捷解新語』における「까지」と「まで」について』『東明論文集』16
- 黃美玉(2000)『「ほど」に關する日・韓兩國語の對照研究:『捷解新語』の用例を中心として』『仁川大學校 論文集』25輯

- 호규진(2016)「첩해신어의 수록어휘」『日本言語文化』34輯
- 洪紫永(1999)「『捷解新語』의 接續助詞에 관한 考察 : 원간본·개수본· 중간본의 용례 분석을 중심으로」경기대학교 학위논문
- 小倉進平(1964)『増訂補注朝鮮語学史』刀江書院(一初版1920年)
- 亀井孝(1958)「『捷解新語』小考」『一橋論叢』第39卷 第1号
- _____(1984)「『捷解新語注音法』—日本語のすがたとこころ—」『亀井孝論文集』吉川弘文館
- 森田武(1952)「『捷解新語』の国語について—その資料性の考察—」『国文学攷』復刊 第一号
- _____(1955)「『捷解新語』成立の時期について」『国語国文』24卷 3号
- _____(1985)「捷解新語攷」『室町時代語論攷』三省堂
- 浜田敦(1970)『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
- _____(1982)『続朝鮮資料による日本語研究』臨川書店
- _____(1990)『国語副詞の史的研究』浜田敦外. 新典社
- 安田章(1980)『朝鮮資料と中世国語』笠間叢書
- _____(1990)『外国資料と中世国語』三省堂
- _____(1996)『国語史の中世』三省堂
- _____(2000)「『捷解新語』の重要性」『日本学報』44輯
- _____(2006)「復権康遇聖 : 韓国人の遺した日本語史文獻」『日語日文學』32輯
- 岩淵悦太郎(1997)「康遇聖の捷解新語」『国語史論集』所収. 筑摩書房
- 中村栄孝(1961)「『捷解新語』の成立改修および『倭語類解』成立の時期について」『朝鮮学報』第19輯
- 青山秀夫(1959)「捷解新語に見える敬語法の特徴」『天理大学学報』28号
- 伊奈恒一(1965)「捷解新語に現われた敬語について」『語文』21集. 日本大学国文学会
- 松浦陽子(1998)「『捷解新語』における飲食を表す動詞の變遷 : 「くう」と「たぶ」を中心に」『日本學誌』18輯
- 古田和子(1985)「捷解新語原刊における漢語の研究 : 日本語本文と韓國語對譯文との對照を通して」韓國의 국어대학교 학위논문
- _____(1993)「『捷解新語』의 語彙와 語法에 대하여」『日語日文學研究』22輯
- _____(2003)「『捷解新語』原刊本の對譯文における漢字表記の語について」『日本言語文化』2輯
- _____(2006)「<捷解新語>の研究 : 資料性と漢字漢語について」韓國의 국어대학교 학위논문
- _____(2006)「『捷解新語』の慣用的表現」『日本研究』27号
- 東ヶ崎祐一(2009)「『重刊改修捷解新語』における仮名の使用状況」『日本語學研究』24輯
- 小泉和生(2010)「의태부사(擬態副詞) ‘するすると’와 ‘술술이’ : ‘첩해신어(捷解新語)’ 자료를 통하여」『日本研究』29輯
- 池田ひろみ(2012)「『捷解新語』における漢語を用いた表現の改修に関する考察」부산대학교 학위논문
- 松上文子(2014)「『捷解新語』における形式名詞の意味と用法」부산대학교 학위논문
- 拙稿(1993a)「「すなはち」小考」『湘南文學』27輯
- _____(1993b)「『捷解新語』の副詞小考」『韓日問題研究』創刊號
- _____(1994)「「一定」小考」『湘南文學』28輯
- _____(1996a)「「かゝて」について」『日語日文學研究』29輯
- _____(1996b)「『捷解新語』の副詞小考2」『韓日問題研究』4輯
- _____(1997)「『捷解新語』の副詞小考3」『人文論叢』5집, 京畿大學校 人文大學
- _____(1999a)「近世日本語研究資料としての捷解新語 : 副詞研究における資料性の考察」『京畿大學校 論文集』43輯
- _____(1999b)「近世副詞小考—「そっと」を中心として—」『日本語文學論叢』柏原司郎先生定年 記念論集
- _____(2000)「副詞「しかしか(と)」小考」『湘南文學』34輯

- ___ (2001a) 「近世日本語の副詞研究 ―「じょうに」「べちに」を中心として―」『日語日文學研究』39輯 1卷
- ___ (2001b) 「近世日本語副詞の通史的考察 ―「いかさま」を中心に―」『日本語学研究』4輯
- ___ (2003a) 「副詞「するする」そうじて」小考」『日本學報』55輯 1卷
- ___ (2003b) 「副詞「けっく」小考」『日語日文學研究』47輯 1卷
- ___ (2003c) 「『捷解新語』の副詞研究 J&C
- ___ (2004) 「副詞「ていと(ど)」について」『湘南文学』38輯
- ___ (2005) 「『捷解新語』の副詞研究―「いちえん」「いっせつ」を中心に―」『日語日文學研究』53輯 1卷
- ___ (2007) 「『捷解新語』の語彙考」『日本近代學研究』15輯
- ___ (2008) 「副詞「ちと」について」『日語日文學研究』65輯1卷
- ___ (2009) 「副詞「げに(も)」小考」『日本語学研究』25輯
- ___ (2010) 「副詞「なんとして」について」『日本語学研究』29輯
- ___ (2012) 「副詞「ほどなく」について」『日語日文學研究』81輯 1卷
- ___ (2016) 「副詞「したいに」の意味用法の変遷について」『日本近代學研究』54輯

논문투고일 : 2017년 09월 27일
 심사개시일 : 2017년 10월 17일
 1차 수정일 : 2017년 11월 13일
 2차 수정일 : 2017년 11월 16일
 게재확정일 : 2017년 11월 17일

＜要旨＞

『捷解新語』の言語研究資料としての価値について

－ 韓国内の日本語研究史を中心に －

朴才煥

本研究は、捷解新語三本の言語資料―特に、日本語―としての価値を立証するために、いままで国内で行われた研究を調査し分野別・発表時期順にまとめた基礎調査である。それは、引き続き行う予定の分野別の具体的な研究成果を確認するためである。以上の調査結果をまとめると次のようになる。

1期(1956年―1980年)には、日本語を学習又は研究する人が少ない時期であるし、改修本の存在は知っていたものの、実物を目にすることができず、捷解新語関連研究は殆んどなかった。

2期(1981年―2000年)には、調査対象の内、3割(54本)ほどが該当する。その内、文法、語彙、敬語分野の論文が7割程度を占めている。

3期(2001年―2016年)には、調査対象の内、7割(117本)ほどが該当する。その内、文法、語彙分野の論文が7割程度を占めている。2期に15%もあった敬語関連研究は1%に止まっている。

Study on Material Value of [Chop Hae Sin O]

Park, Jae-Hwan

This research is a basic survey of domestically studied research to compare three linguistic materials - in particular Japanese, in order of field and release time . This is to confirm concrete research results by field to be continued. The above survey results are summarized as follows.

In the 1st term (1956-1980), there are few people learning or studying Japanese, and although I knew the existence of the repair book, I could not see the real thing. There were few related work.

In the 2nd term (1981-2000), about 30% (54) of the survey subjects fall. Of those, about 70% of grammar, vocabulary and honorific-language papers are occupied.

In the third period (2001 - 2016), about 70% (117) of the survey subjects fall. Among them, about 70% of articles in grammar and vocabulary fields are occupied. Honorifics related research is limited to 1%.